

## 2-11-12

稀釈家兔血清投与後の肥肝細胞顆粒の電子顕微鏡的酸性フォスファターゼ反応

日高 硬, 池田識道, 芦原 司,  
竹岡 成  
(滋賀医大・病理)

前回までの成績では, 再生肥肝細胞, ヒスタミン遊離剤 (Compound 48/80)・抗ラット家兔血清投与後の肥肝細胞ではいずれも網状顆粒が増加する。しかし, 酸性フォスファターゼ反応 (AcP反応) を行なうと上記の網状顆粒の反応態度は異なり, 再生肥肝細胞では陽性, Compound 48/80 投与後では陰性または微弱陽性, 抗血清投与後では陽性もしくは陰性の所見が認められる。われわれは再生肥肝細胞では分泌促進状態, Compound 48/80 投与後では脱顆粒, 抗血清投与後では両者の複合した変化と解釈した。

抗血清中の抗体以外の血清因子の効果を確かめるために, 今回稀釈家兔血清をラット腹腔内に投与して, 短時間後に採取した腹腔内の肥肝細胞を電子顕微鏡的 AcP 反応で検索した。

稀釈家兔血清投与後の肥肝細胞では対照 (無処置) に比べ, AcP 反応陽性の網状顆粒が増加し, その顆粒変化は再生肥肝細胞のパターンに酷似していた。すなわち, 顆粒構造の連続的推移とこれに密接に関連した AcP 反応が認められる。

以上より, 稀釈家兔血清投与により肥肝細胞の分泌機能が促進されていると推察される

## 2-11-13

実験的脾梗塞におけるセロイド色素の生成過程の組織化学的・電顕的研究

小倉基裕, 井上 昇, 前田隆英  
(関西医大・第一病理)

セロイド色素の成因として出血性壊死病変が重要な意義を有することを演者らは従来より強調してきた。今回我々はマウスを用い, 実験的に脾動脈を脾門部で結紮し, 貧血性梗塞を作製し, 3日, 1週, 10日, 2週, 3週, 4週, 5週, 7週……と経時的にマウスを屠殺し, その脾に就てセロイド色素の形成過程を組織化学的並びに電顕的に観察した。この際特にライソゾームの marker である酸フォスファターゼ (ACPase) 反応を光顕的並びに電顕的に行った。その結果, 結紮後 2~3 週になると脾は中心部に限局性に壊死巣が認められるほか, ほぼ正常構造を示し, 同時に実験動物の過半数に於てその脾索内に黄褐色色素 (組織化学的検索によりセロイド色素と同定) 含有腫大大喰細胞の集団が漸く出現してくる。結紮後 4 週では脾は肉眼的に正常の約  $\frac{1}{2}$  以下に萎縮し, 組織学的に脾門部を中心とする線維化 (癥痕化) がみられ, セロイド色素含有細胞は主にこの部位に集簇している。この時期の電顕像では ACPase 反応陽性大喰細胞胞体内にフェリチンの集簇像及び residual body としてのセロイド色素の形成を認めた。この新知見はセロイド色素生成における出血性壊死の関与を支持するものとみなされる。